

# 笑ってごらん

第 665 号 2019. 11. 26 発行

～今日の格言～

花を支える枝 枝を支える幹 幹を支える根  
根はみえねんだなあ

相田みつを



先日、島津家 33 代当主島津忠裕氏による『令和の時代をどう描くかー鹿児島から見る世界ー』と題した講演を聴講した。

薩摩はその昔「西端」と書いて「サツマ」だった。大隅も含め、どちらも「辺境」を意味する。しかし、これを「陸の終わり」と捉えるか、「海の始まり」と捉えるかによって、大きな違いが生じる。

島津家は「海の始まり」と捉え、異国との貿易事業を展開、交流を続けたことにより 800 年間も家を維持できた、と。

その中で、既存知（既にわかっていること）と既存知の組み合わせによる新結合（創造・革新）が生まれた。砲台や薩摩切子などの技術である。

島津氏は次世代を担う若者へのメッセージとして、

- ① 専門性（強み）を深める
- ② 遠くの知を探求する
- ③ 日本・鹿児島を知る

ことを通じ、今後訪れる正解の無い問題に対して追求していく力を養って欲しい、と締めくくった。

また、「この世は権利と義務によって成り立っている」ことに触れ、流行の SNS 等で自己表現することは大事だが、一つ間違ると相手の権利を奪ってしまうことになりかねない、と釘を刺された。



## 白紙

ある興味深いコラムを目にしたので紹介する。

2002年にノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊東京大特別荣誉教授は自身が東京大学院生時代に臨時講師を務めた中学校で「世の中に摩擦がなくなったらどうなるか答えよ」という記述式の問題を出した。

不正解者が続出する中、答案を白紙で出した生徒は正解。なぜか？「摩擦がなかったら、鉛筆で答案を書けない」からだった。

小柴氏はあらかじめ、白紙の答案を正解にすると決めていたのだろうが、生徒たちは驚いたはずだ。正答した生徒はまぐれだったかもしれないせよ、結果的には独創的な解答が生まれ、それが正解になった。記述式問題の自由度の高さを示す逸話だろう。

さて、新たに大学入学共通テストにおいて記述式問題が導入される。50万人ともされる受験者の「記述」解答を公平かつ正確に採点するにはどうするか論議が進められている。もちろん、時間的制約を考えれば、多くの採点者を用意して臨まなければならないことは理解できる。しかし、一部で報じられているように「アルバイトを雇って採点する」ことによる採点の公平性について不安が生じていることも事実。先頃、英語民間業者試験の導入が先送りされた。十分な議論がなされぬまま発表し、その結果、世間の「炎上」に近い反応に至り、慌てて収束を図ったように見える。

現高校二年生以降の進路を決める大切な入試制度である。「十分な整備ができないので白紙撤回する」という結末すら予見できる展開に、少々やきもきしながら国の判断を待っている。